

石灰化を呈し抜去が困難であった腔内異物の一症例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡産科婦人科学会 公開日: 2020-10-14 キーワード (Ja): 腔内異物, 石灰化, 膀胱腔瘻 キーワード (En): 作成者: 榛葉, 頼子, 矢田, 大輔, 小田, 彩子, 東堂, 祐介, 伊藤, 敏谷, 鈴木, 康之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003767

石灰化を呈し抜去が困難であった膣内異物の一症例

A case of vaginal foreign body which was calcified and difficult to remove

富士市立中央病院産婦人科

榛葉頼子、矢田大輔、小田彩子、東堂祐介、伊藤敏谷、鈴木康之

Department of Obstetrics and Gynecology, Fuji City General Hospital

Yoriko SHINBA, Daisuke YATA, Ayako ODA, Yusuke TODO, Toshiya ITO, Yasuyuki SUZUKI

キーワード：膣内異物、石灰化、膀胱膣瘻

〈概要〉

膣内異物が放置される例は、産婦人科ではまれに経験される。症例は50歳。スプレー缶の蓋を膣内に自己挿入し、抜去できずに約2年間放置していた。抜去目的に当院を紹介され、腰椎麻酔下に子宮把持鉗子で抜去した。抜去された異物は、石灰化物質で覆われており、成分分析では、リン酸カルシウムとリン酸マグネシウムが検出された。報告では膣内のカルシウムイオン、マグネシウムイオンは尿の成分に由来すると結論づけられるものが多い。膣内異物の症例では膀胱膣瘻を来していることも多い。

本症例では画像検査で膀胱膣瘻などの解剖学的異常はなく、抜去可能であった。長期間放置された膣内異物の診療では、膀胱膣瘻などの解剖学的異常も含め、画像検査で評価することが有用である。

<Abstract>

A case that foreign bodies in the vagina are left is rarely experienced at the obstetrics and gynecology department.

The patient, a 50-year-old woman inserted the cover of a spray can into the vagina by

herself and left it for two years. She was referred to our hospital to remove the vaginal foreign body. We could remove it by using uterine grasping forceps under spinal anesthesia. The component analysis revealed that the removed material was covered with calcium phosphate and magnesium phosphate in the present case. Many reports conclude that the calcium and magnesium ions in the vagina are derived from the components of urine. In the cases with vaginal foreign body, the patients have complications, such as vesicovaginal fistula. Fortunately, our case had no complications. In the treatment of vaginal foreign bodies that have been left for a long period of time, it is useful to evaluate them by imaging examination, including anatomical abnormalities such as vesicovaginal fistula.

【緒言】

自慰行為などで膣内に異物挿入し、抜去困難のため緊急受診する例は、産婦人科ではまれに経

験される。しかし、挿入された腔内異物が長期間放置される例は、日常生活動作 (ADL) の自立している成人では少ない。今回我々は、約 2 年間放置された腔内異物の周囲に石灰化を呈し、抜去に難渋した症例を経験したので報告する。

【症例】

<患者> 50 歳、0 妊 0 産

最終月経は当科受診の 3 か月前

<主訴> 特になし

<既往歴> 躁鬱病で内服加療中

<ADL> 自立

<現病歴> スプレー缶の蓋を腔内に自己挿入し、抜去できずに約 2 年間放置していた。抜去を希望し、近医産婦人科を受診したが、経腔的に抜去困難であったため当院紹介初診となった。

<入院時所見>

身長 153cm、体重 78kg

バイタルサイン: 体温 37.1°C、血圧 124/76 mmHg、脈拍 62 回/分

内診所見: 腔内に約 5cm 大の異物あり。外見は灰白色で固く、石灰化物質のようであった。異物のために子宮口は触知できず。異物は鑷子等で牽引しても抜去できなかった。

検査所見: WBC 8200 μ /l、CRP 1.12 mg/dl。

他の一般血液生化学所見には特記すべき異常なし。

尿検査: 白血球 3+、潜血 3+

腹部 MRI 検査 (図 1) は、T2 強調画像の矢状断と水平断では腔内を占拠する異物構造を認めた。深部腔壁には不整形の高信号部分があり、液体貯留があると考えられた。また、周囲の膀胱壁や直腸壁には明らかな欠損を認めなかった。

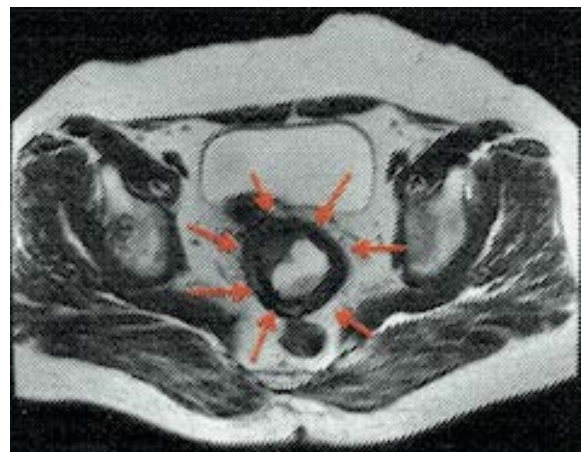
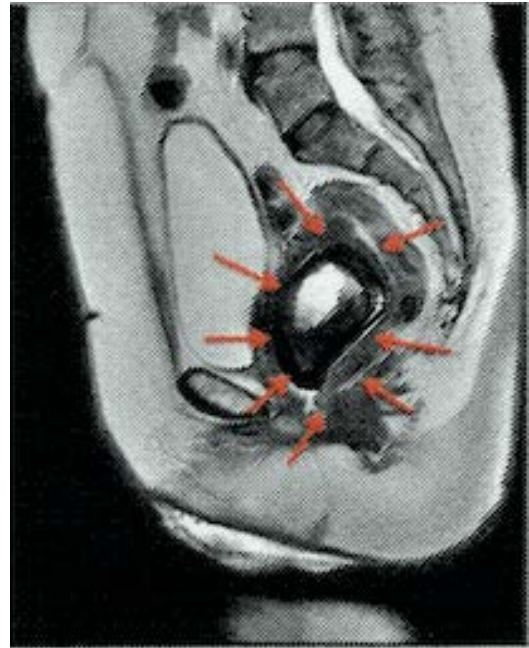


図 2 MRI T2 強調画像 (上: 矢状断、下: 水平断)

<経過>

外来での抜去困難のため、入院とした。腰椎麻酔(L2/3、0.5%高比重 bupivacaine 2.6 ml)下、碎石位で処置を開始した。異物を視認し(図 2a: 写真左)、ペンチや単鉤針子などを使用して牽引したが抜去できず、開腹の可能性も考慮した。左側に会陰切開を施行、子宮鉗子を異物の左右から一葉ずつ挿入、把持牽引し、慎重に鉗子分娩の要領で抜去した(図 2b: 写真右)。



図 2a (左: 腔鏡診)、2b (右: 異物抜去時)

抜去された異物は、直径約 5.5cm、長さ約 7cm で、固い石灰化とみられる物質に覆われていた(図 3)。

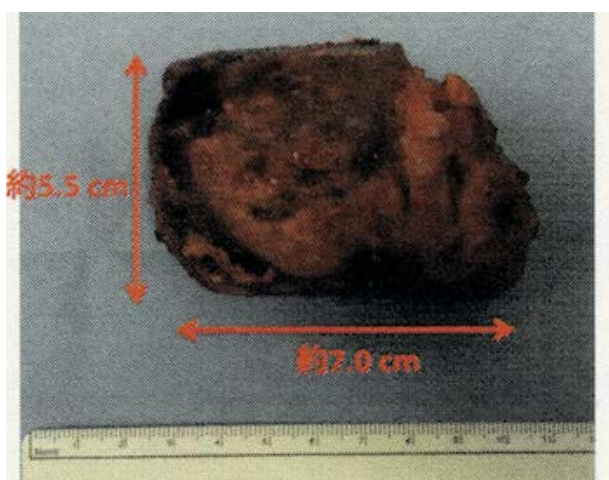


図 3 抜去された腔内異物

周囲の石灰化様物質を割ると、中に悪臭のある膿汁が貯留しており (図 4a: 写真上)、さらにそれを取り除くとスプレー缶の蓋の中にひとまわり小さなプラスチックの蓋を認めた(図 4b: 写真下)。のちに本人に確認したところ、「スプレー缶の蓋が抜けなくなったので一回り小さなキャップに引っ掛けてとろうとした」とのことであった。



図 4a (上: 異物の中は悪臭のする膿汁)

4b (下: 左はスプレー缶の蓋で右は小さなプラスチックの蓋)

患者は経過良好で術後 2 日目に退院となり 1 週間後の外来でも腔内にびらんを認めるものの、その他に大きな異常なく経過し、終診となった。異物周囲の物質を病理検査に提出したところ、石灰化物質であることを確認した。成分分析では、リン酸カルシウムとリン酸マグネシウムが検出された。また、腔分泌物の細菌培養検査では大腸菌 3+であった。

【考察】

本症例で検出されたリン酸カルシウムとリン酸マグネシウムを含め、腔内には本来カルシウムイオン、マグネシウムイオンは存在しない

1)。 腔内の石灰化物質に関する日本国内の報告はすべて成人例であり、尿の成分に由来すると結論づけられるものが多い。

腔内の石灰化物質についての報告は、検索し得た限りでは国内では9例のみである²⁾⁷⁾。腔内に異物はなくADL低下のある人に腔結石が見つかったものが5例^{2), 5)}、ADLの自立した人において腔内異物から膀胱腔瘻を形成し尿の成分が腔内に流れ込んだと推定されたものが3例^{4), 6), 7)}であった。残りの1例³⁾は原因不明であったが、腔内異物除去のため受診した際に腔内に石灰化物質が検出された。

一方、石灰化物質の有無に関わらず、腔内異物による膀胱腔瘻の報告は、検索し得た限り、国内では9例のみであった^{4), 6), 7), 8)13)}。腔内異物の除去方法は、膀胱腔瘻を伴う例では経腹的アプローチを選択する例も見られた⁹⁾¹³⁾。

腔内に石灰化物質を形成する病態としては、腔内異物から膀胱腔瘻を形成した場合に多く、次いでADL低下患者で、長期間尿が腔内にたれ込むことで腔内に結石形成した場合があげられる。しかし本症例では、異物を認めるものの肉眼的・画像検査で膀胱腔瘻は認めなかった。

本症例において腔内石灰化の原因は不明であったが、尿の腔内への流れ込みが少量ずつ長期間にわたり、さらに腔内異物により排出が制限されたことで、長期的に石灰化物質を形成した可能性は考えられた。

本症例では診察所見ならびに画像検査で膀胱腔瘻や直腸腔瘻を認めなかったことから、経腔的に異物除去し、術後も特記すべき異常なく経過した。しかし、長期間放置され、石灰化を呈した症例においては、膀胱腔瘻の可能性を常に念頭において診療しておく必要があると考えられる。

結論

石灰化を呈した腔内異物は、膀胱腔瘻となつてはじめて発見され、開腹手術が必要となることもある。長期間放置された腔内異物では、膀胱腔瘻などの解剖学的異常を、画像検査で評価する必要がある。

本論文の内容は、平成27年度静岡産科婦人科学会春季学術集会で発表した。

〈参考文献〉

- 1) 岩川眞由美, 鈴木利弘, 大川治夫, 他. 診断までに1年半を要した腔内異物の5歳女児例. 日本小児外科学会誌 1997; 33:765-769
- 2) 松澤直輝, 中島慶子, 四家正一郎. 骨盤底に異常石灰化を認め、精査で腔結石と診断された重症心身障害者の一例. 日本重症心身障害学会誌 2011; 36: 495-498
- 3) 新村光司, 横田広夫, 本山博信, 他. 石灰化を呈した腔内異物の一例. 茨城県臨床医学雑誌 2007; 42: 43-44
- 4) 関戸哲利, 遠藤剛, 遠藤瑞木, 他. VESICAスリング術に用いられたHemashieldが尿道内に迷入して石灰化し尿道腔瘻を形成した1例. 日本ウロギネコロジー研究会誌 2004; 1: 47
- 5) 齋藤和代, 黒澤真紀子, 増子香織, 他. 重症心身障害者に見られた腔結石の4例. 日本重症心身障害学会誌 2006; 31: 275-278
- 6) 堀量博, 高山雅臣. ペッサリーに軽石状石灰化沈着を 起こした子宮脱の一例. 日本産科婦人科学会東京地方部会誌 2002; 51: 245-248
- 7) 鈴木真理子, 川島英理子, 市古哲, 他. 1年間放置された腔内異物により、膀胱腔瘻をとも

なった巨大結石を形成した1例. 東海産婦人科学会雑誌 2010; 47: 299

8) 東陽一郎, 上田正山, 清田浩, 他. 異物による膀胱・腔直腸瘻の1例, 慈恵医大誌 1986; 101: 854

9) 田平勝郎, 山内茂人, 渡辺直生, 他. 長期ペッサリー装着による直腸腔瘻および膀胱腔瘻の1例, 日産婦東京 会誌 1987; 36: 45-47

10) 宮城徹三郎, 島村正喜. 膀胱腔瘻合併例を含む膀胱異物の3例. 石川中病医誌 1988; 10: 163-166

11) 山下努, 植竹奏, 伊藤晃子. 腔内異物によって発症した膀胱腔瘻の1例. 日産婦関東連 会誌 1989; 49: 140

12) 江川雅之, 浅利豊紀, 宮崎公臣他. 腔内異物による膀胱腔瘻. 臨泌 1996; 50: 237-239

13) 花井禎, 宮武竜一郎, 加藤良成, 他. 腔内異物による膀胱腔瘻の1例 泌尿器科紀要 2000; 46: 141-143